笑っている骨

いつからか、知らないが
季節が
僕の廻りで停まっているのに
気づいた日
露店の出ていた公園で
小山を造っている少女。
手の中に笑っている骨がある。
長い髪に結んだ赤いリボンが
人目を引く。

調子はずれの拍手が
音楽堂から聞こえた時
少女の記憶が
カレンダーの中に落ちた。

確か夏だったような気がする
廻り燈籠がいくつも

人気のない校庭に並んでいたのを
少女は覚えている
そして、川向うでは
騒がしい人々の群れが
土を掘っている。

原色の旗があった。
白い箱があった。
そして
女の泣き声があった。

いつからか知らないが
季節が流れ出した日
僕は臆病な月が
少女の背中に隠れたのを
見た。